

招致失敗のレガシー 名古屋オリンピック構想

『週刊金曜日』5月20日号に懐かしい写真が掲載されていた。平和公園（名古屋市千種区）の南側で、散策路などが整備されている「くらしの森」エリア。名古屋五輪が行われればメインスタジアムが建つ場所だった。水田や畑もあり、現在はNPO法人なごや東山の森づくりの会が保全に取り組む。写真左上方向に伸びる道が「キラニン通り」。



名古屋に住んでいた頃、よく散策したところだ。記事を抜粋して紹介したい。

さかのぼること45年。名古屋市は1988年夏季五輪の開催都市に名乗りを上げ、招致活動を始めていた。聖火を灯す巨大競技場は、ここ平和公園の南側丘陵を拓いて建設する予定だった。結果的に開催都市は韓国のソウルが選ばれ、五輪がこなかった名古屋の森は開発を逃れるが、はからずも五輪構想は都会の真ん中にある豊かな自然を見直すきっかけとなった。多くの市民が平和公園の森を壊すなど叫び、里山を守る活動が活発化。公園一帯での保全活動は以降も継続され、今や森は自然の大切さが学べ体験できる空間として多様な人間を集める。

森の中には「キラニン通り」と呼ばれる舗装道がある。これは招致時のIOC会長キラニン氏らの視察に備え整えたもので、かすかに残る当地が五輪と無関係ではない証。そうだ、あのころ言われなかった昨今の流行語を使おう。これは名古屋五輪（ただし未開催）の「レガシー（遺産）」である。

右肩上がり日本経済にはっきりかげりが見えた1970年代後半、名古屋での五輪招致はいきなり動き出す。「びっくりでしたが、あの時代はオリンピック賛成が当たり前。最初は反対の声は聞こえなかった」当時小学校の教員で、『反オリンピック宣言』の共著書がある岡崎勝さんはそう振り返る。

ただ、大イベントを使った地域振興や開発特需のもくろみは、初めから市民意識との温度差があった。環境問題や予算面でのずさんさに疑義が唱えられても、納得する説明をしないまま招致に突き進む行政当局。次第に名古屋五輪、さらには五輪自体に反発する市民グループがいくつも生まれることになる。

レポートに何回も書いてきたように、私にとって名古屋五輪「招致騒動」は忘れられない。名古屋に就職して、最初に直面したのが名古屋五輪。たまたま自宅が五輪メイン会場予定地の近くの古びたアパートで、平和公園南部は散策ルートであった。五輪批判の論文も書いたりした。その意味で、私の調査研究の「原点」でもあった。それから40数年後、大阪の地で万博、IRカジノに向き合っている。何だか人生の歩みを感じる。

(2022年5月26日)